

能

代高校は2017年度より、探究活動を軸にした「New Will Project」という取組を推進している。1年次にまず「地域課題解決型」のグループ探究に挑戦。アグリ・グリーン・ライフ・ツーリズム・ヘルスの5領域について生徒が希望ごとに分かれ、5〜7名の班で活動する。2年次には「キャリアデザイン型」の個人探究へ。一人ひとりが自己の将来を意識した課題を設定し、調査や分析を進める。

この取組で重視しているのが、振り返りだ。活動中、生徒は自分で考えたことや行動したことを、ICTを使って随時記録し、本人がいつでも活動を振り返ることができるようにしている。また、年3回の発表の場を設け、そのつど「自己評価」「相互評価」「外部評価」を行い、活動を多面的に振り返ることもしている。

そうして3年生になったら、今までの探究活動の記録も参考にして、進路を見定め、志望理由をまとめていく、というのが全体の流れだ。

背景・ねらい

生徒が自己を見つめない 個に応じた指導はできない

同校は、能代・山本地区の中心的進学校だが、昨今は、少子化および中央地区に進学する中学生の増加で、定員割れが続いていた。このため、高校入学時の学力は生徒間で差が出るよう

になり、卒業後の進路も進学から就職まで選択肢が広がり、生徒の多様化が進んでいた。同時に、推薦・AO入試の増加など、進路実現のために求められることの多様化も進行、先生たちは「個に応じた指導」の必要性を感じていたという。

ただ、個に応じた指導をしたくても、生徒たちは「素直だが積極性に欠ける」傾向があり、ともすれば指示待ちになるという課題があった。

こうした問題意識から、教育活動の見直しを図るようになった、と進路指導主事の塚本真嗣先生は語る。

「個に応じた指導をするには、日々の学習活動で主体性を育みながら、生徒自身が振り返りを重ねて自己を見つめるような、『自立した学習者』に成長できる環境にしなければ、と認識するようになったのです。本校では以前からWill Projectというキャリア教育を行っていましたが、社会人講話やインターシップを生徒が目的意識もなく体験するなど、形骸化していた部分もあり

ました。そこで、生徒が自分なりの課題をもって社会と関わる体験をし、自ら振り返って探究する、という活動にシフトさせたのです。生徒主体の活動で、おのおのが自己の課題や進路を明確にしていけば、キャリア教育としても深化するだろう、と。それが探究を軸にしたNew Will Projectです」

実践

報告や発表の機会を生かし 多面的に活動を振り返る

New Will Projectの特徴の一つは、「探究でどんな資質・能力を育みたいのか」を、ルーブリックによって前もって生徒に示していることだ。

「生徒に対してルーブリック説明会も行い、どういう力をどのレベルまで高めたいか、という評価の観点を共有します。そうすることで、生徒の活動への意識が高まり、自己評価や相互評価もやすくなり、振り返りの質が高まると考えています」(塚本先生)



発表会の様子。聴き手の生徒たちはスマホを使い、各発表の内容やプレゼンのレベルを4段階で投票、コメントも送信。発表者はその結果を円グラフやコメント一覧で確認し、振り返りに活かしていく。

Case 2

探究

今成果を上げることで 生徒が成功も失敗も振り返り 自ら成長することを目指す

能代高校 (秋田・県立)



写真左から、進路指導主事の塚本真嗣先生、岩谷宣行先生、杉澤 育先生

本人の希望に沿った進路を支援したいのに、「指示待ち」になる生徒たち。この課題を乗り越えようと、探究活動で振り返りを活用した事例を紹介します。

取材・文／松井大助

学校データ

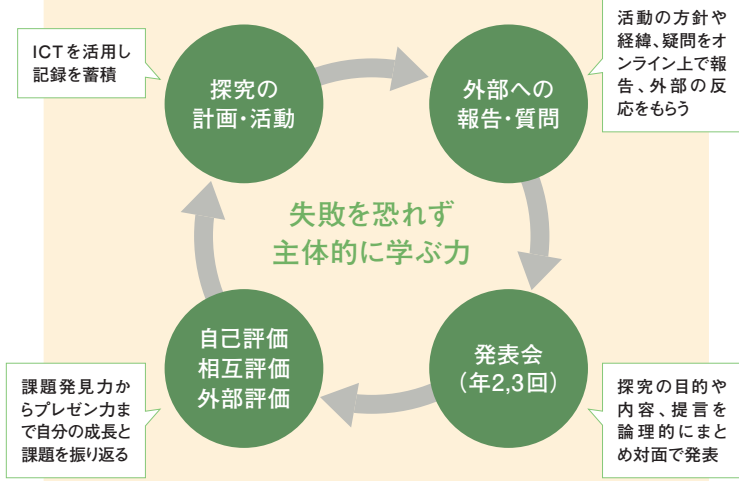
1914年創立／普通科・理数科／生徒数630人(男子316人・女子314人)／校是は「文武両道」。
グループ探究活動や個人探究活動を教育活動の中心に据える。



学びのサイクル

探究活動のサイクル図

1年生は5～7名によるグループ探究を、2年生は個人探究を、下のようなサイクルで進める。先生は「手をかけすぎない」ことを重視。外部への報告や発表では、生徒が自ら考えたことを示し、反応をもらうことを大切にしている。



また、大学や市役所、地元の企業やNPOの協力を仰ぎ、「生徒が活動の報告や発表をする機会」を意図的に増やすことで、振り返りの頻度や質を高めることも狙っている。

活動中、生徒たちは日々の取組を「CTを使ってオンライン上の「校内グループ」に記録、蓄積。そのグループには大学教授や市役所職員など外部アドバイザーも所属しており、節目のタイミングで、まずはオンラインで、生徒たちが気づいたことや疑問に思ったことを報告・質問するのだ。生徒たちは「それなりの形でアドバイザーさんに報告しなければ」と思う一方で、今ま

での活動の気づきや疑問を整理し、きちんと振り返る良い機会になっているという。

次いで中間発表会の準備へ。オンラインでアドバイザーからもらった助言を踏まえ、探究テーマや、活動の経緯、展望を、班のメンバーで手分けして発表資料にまとめる。この作業もまた、「何を思って探究を始め、どんなことを感じ、次はどうするか」という、自分たちの意思や気持ちを見つめ直す一つの振り返りだ。

当日の発表会には、外部アドバイザーを招き、プレゼン後に改めて指導助言を仰ぐ。また、そのアドバイザーと他

の生徒が、今聴いた発表についてルーブリックを基に「課題発見力」「調査力」「話し方・態度」などを4段階で評価。ICTのアンケート機能を活用し、手持ちのスマホからコメントも添えて回答する。結果は即時集約され、教室のスクリーンに表示される仕組み。同時に、発表した生徒も自己評価を行う。そうして「自己評価」「生徒同士の相互評価」「外部アドバイザーの評価」を組み合わせて、自分たちの良かった点や改善すべき点を、独りよがりにならず多面的な視点から振り返るのだ。

以降は、その多面的な評価から学んだことも生かし、探究を進め、再び「オンラインでの報告」「成果発表会」というサイクルを繰り返す。

「生徒が報告や発表をして、そこで得た助言や評価を基に、自ら課題をより明確にしたり、話し方を工夫したりすれば、探究やプレゼンの質を自分で高められます。そのスパイラルを重ねて、生徒の成長を促せればと思っているのです」(塚本先生)

さらに1月には、選出された生徒が全員の前でプレゼンする1・2年生合同優秀発表会も開催。他の生徒はその発表を通して、「今年度の自分の課題や成長」から「これからの学校生活や進路実現に生かしたいこと」まで振り返り、次につなげていく。

なお、こうした探究活動を進めるにあたり、先生たちが大前提として意識していることがある。それは、「口出し

せずに見守ること」だと岩谷宣行先生は言う。現3年生のこれまでの探究活動に、1年生の時から寄り添ってきた先生だ。

「まずは1年生のグループ探究で、何をどう進めるかも生徒が自分で考えます。戸惑って動けずいたら『手法は先行研究からも学べるよ』『アドバイザーさんに何を質問する?』などとしてくことはありますが、テーマ設定や活動計画は生徒に任せます。私たちが手を貸してコンテストで賞を取るような

探究活動の自己評価や相互評価に使うルーブリック。4段階で点数をつけるほか、シートの後半部分は「良かった点」や「改善すべき点」について自由記述する形式になっている。

担当教員に提出
チェックの後、Classiに入力作業

別紙4 「探究活動・プレゼンテーション」ルーブリック (自己評価)

評価項目/レベル	レベル1 (不可)	レベル2 (可)	レベル3 (良)	レベル4 (優)	点数 (1~4)
課題発見力	テーマが漠然としており、調査の目的や項目、仮説が不明確である。	テーマが設定されているが、調査の目的や項目、仮説などがわかりにくい。	表現可能なテーマ設定がなされ、調査目的や項目、仮説が示されている。	表現可能な発展性のあるテーマ設定がなされており、調査目的や項目、仮説も具体的かつ明確に示されている。	
構成内容 (論理性)	「課題設定のねらい」「仮説」「調査内容」「具体的提言」の体裁だけは守られている。	それぞれの内容について、論議に一貫性があり、大きな論理的矛盾もなげ、やや荒さも見られる。	それぞれの内容について、論議が一貫性があり、論理的矛盾もほとんど見られない。	それぞれの内容、特に提言について論議も意識された構成や表現がなされている。	
提案力 (課題解決力)	高校生レベルに達していない。概念の提案。(誰でも考えられるようなレベル)	持続可能な「地域社会」の実現のための具体的な提案ができていない。(ただし、よくある目新しいものがないレベル)	持続可能な「地域社会」の実現のための、建設的な提案ができていない。	持続可能な「地域社会」の実現に向け、自治体や企業等に実際に提案できる高水準の内容となっている。	
調査力	簡単なネット検索のみが行われたため。(先行事例・研究が把握できていない)	限られた情報源ではあるがよく調べ、関係機関へのインタビュー等も行うことができていない。(先行事例・研究に触れている)	複数の情報源から情報を集め、それを集約しながら、効果的に関係機関からの情報収集にも成功している。	本格的な調査に加え、大学や自治体・企業などにアプローチし論文なども参考にして、先行研究や先行事例も把握しつつ調査を進めることができていない。	
話し方・態度	チェック項目が0~1	チェック項目が2~4	チェック項目が5~7	チェック項目が8~9	
P P 資料の完成度	チェック項目が0~1	チェック項目が2~4	チェック項目が5~7	チェック項目が8~9	

中身にすることが活動の目的ではなく、生徒が自分で考え、失敗もしながら、自身で振り返って学ぶことを大事にしたいからです。そしてその学びを生かして、2年生の個人探究にステップアップします」

もっとも、まったく何もせず生徒を放り出しているわけではなく、探究活動とリンクさせた情報科の授業で、思考の整理や振り返りに役立つことは全員が学ぶという。その授業を担当しているのが杉澤 斉先生だ。

「アイデア出しのためのイメージマップの活用、情報をグルーピングして優先順位をつけるやり方、課題を5W2Hで考えてみる手法などを、探究とは別テーマで、情報科の授業で先にトレーニングして学びます。それでも生徒たちは、探究活動で考えがまとまらず悩むことがあります。そうしたときは、自分たちで方向性を見出せるよう、対話で生徒の思いを引き出すことを意識しています」

生徒の変容

振り返りで目的意識が育ち 自信や意欲も培われる

探究活動で生徒が自ら考えて動き、振り返ることを重ねていくと、体験学習にのぞむ姿勢にも変化が表れた。顕著な例が、インターンシップだ。自分は何を探究したいのか、どんな力を高め

たいのか、振り返りを重ねながら目的意識を育んできただけに、インターン先から「質問の質が変わり、積極性も増した」という反応が返ってくるようになった。

活動全体を通して、自信や意欲も育まれていくようだ。優秀発表会後の最終の振り返りでは、生徒がアンケートにこんな思いを記している。

「複数の資料や情報をわかりやすくまとめ、説明する力がついたと思う。優秀発表会は、自分にはない視点で各テーマを追究していて、興味深い内容だった。来年は個人探究だが、今のうちから広くアンテナを伸ばし、いろいろなことに関心をもちたい」

「電話をしたり足を運んでお話を聞いたりすることで、コミュニケーション能力や度胸がつき、少し成長できました。2年生の個人探究では、この積極性を生かし、深く掘り下げて考えていけるようにがんばりたいです」

「勉強でも部活でも、工夫し、考えることの必要性を改めて感じた。目標設定だけでなく、その目標実現のために自分なりの考えをもつことや行動に移すことが、進路実現に向けての第一ステップだと思った」

振り返りで自分の課題や成長をつかんだからこそ、「次はこうしたい」という新しいWIIIが芽生えてきたことを感じさせる。New WIII Projectの1期生が卒業した昨年度は、大学などに提出す

生徒インタビュー

探究活動の振り返りを通して 自分の「課題」や「成長」を発見



写真左から、3年生の大谷 巖さん、鈴木 葵さん

● 探究活動で良かったのは、自分を客観的に捉えられたことです。課題設定がうまくいったと思ってルーブリックの表を見たら、4段階中まだ下から2番目のレベルだったり。みんなで発表し合うことで、ちょっとした競争意識をもちながら、論理性や話し方などを磨くことができたとも感じています。個人探究では「高校生アスリートの理想的生活」を考えました。運動部にアンケートを取り、インターン先で栄養士さんにも話を聴いて。栄養に興味があったので、大学でも学びたいです。(大谷さん)

● 探究活動は、課題を見つけることも、課題にどうアプローチするかも「時間だけ与えられて自分たちで考える」状況だったので、大変でした。中間発表で外部アドバイザーさんから厳しいコメントをもらって、落ち込んだことも。でも、活動を振り返るなかで「主体性や課題発見力を高めて成長できた」とも実感できたので、貴重な経験だったと思います。個人探究では「育種」と「スマート農業」を追いかけ、農業試験場にインターンもしました。この先も農学のことを学んでいきたいです。(鈴木さん)

今後の展望

多面的な評価を起点に より良質な振り返りを

取組を進化させるために、関係者一同でさらに議論したいこともある。一つは、発表会で自己評価・相互評価・外部評価をしたときに、「教員がそれら評価のどこを拾ってあげると、生徒の振り返りがより深まるか」を話し合っていくことだ。

「教員の関わりによって、生徒のその後の活動を前進させることもできますが、逆の場合も起こりえます。我々もまだ試行錯誤しているところですよ」(岩

る志望理由書の内容が充実。推薦・A
O入試の合格率がぐんと高まった。

谷先生

「その点では、生徒発表後の外部の指導助言が、我々の学びにもなっています。『そんな視点からも褒められるのか』など、気づきを得られることが多いです」(杉澤先生)

もう一つは、外部との連携を、持続可能な形で発展させることだ。

「ご協力いただいている大学や市役所、地域の方には、かなりのご負担をかけていて、感謝しかありません。一方で、生徒の発表の場をもっと広げてあげたい、という思いもあるのです。例えば外出向いてプレゼンするなど、生徒が発表して多様な意見を頂き、振り返りながら学ぶという場を、今後もしっかりと確保していきたいと思っています」(塚本先生)